パネルディスカッション

パネリスト：山崎幹根氏／大西律子氏／原田裕恵庭市長／渡部俊弘北海道文教大学学長
モデレーター：小磯修二　地域創造研究センター長

地に足のついた「知のプラットフォーム」を目指して

小磯　先ほどはこれからの地域創造研究センターの活動について、私なりの思いをお話しさせていただき、山崎先生と大西先生からは今後に向けた貴重なアドバイスをいただきました。それを踏まえて、今後のセンターの具体的な活動方向について議論を深めていきたいと思います。

まず、原田市長と渡部学長から、私の基調報告と山崎先生と大西先生の講演についての感想をお聞かせください。

原田　今日は本フォーラムのために恵庭市にお越しいただき、感謝申し上げます。

小磯先生からは、以前からセンターの役割や恵庭市との関係、あるいは他の自治体との関係など、じっくり考えながら取り組んでいこうと聞いていました。私どもも焦らずにじっくりお付き合いをさせていただきたいと思っています。

山崎先生のお話にありましたが、自治体間競争を意識しない日はありません。ただ、まちの特性を生かしながら進めていくことが大切なので、恵庭の特徴を生かして、これからも自信を持ってまちづくりを進めていきたいと思います。公共政策には著作権がないということでしたが、ただ真似をするだけでは地に足がついた政策にはならない、理念や方向性を定めることが大切だというお話はその通りだと感じました。

職員には他のまちの取り組みを調べることや現地を視察することの大切さを話しますが、私たちのまちに根付く政策になるのかということを考えるように伝えており、山崎先生と同じ考えです。

また、大西先生のA町での活動、プラットフォームであるLabを中心に、行政職員や民間人、専門家がみんなでまちのことを議論していく場を持って活動していることについては、本当に感動しました。今後、私どもがその場をどのようにつくり上げていくのかは、しっかり研究していきたいと思います。

地元に暮らしている市民や専門家の方々と一緒に積み上げていく本物の政策を、理念や方向性を定めながらつくり上げていくことが大切であることを改めて感じました。

渡部　私も原田市長の意見に共感します。大学の立場からは、やはり人づくりが大切だと考えています。大西先生のお話から、対話によって理解していくプロセスをワークショップで進めていくことは、多様な価値観を認め合っていくことだと改めて感じました。若い世代はスマホを操作できる能力はありますが、対話をすることが難しい場面もあります。コロナ禍でオンライン授業も導入しましたが、友達ができないなど、心理的な影響がいろいろ出てきています。

そこで、先進的にSDGsに取り組んでいる恵庭の「えこりん村」での体験的な授業を１年生に経験してもらっています。

地域創造研究センターでも多様な人たちが参加し、対話することで、まちづくりのプラットフォーム機能の確立や、恵庭市のよりよい公共政策に繋がっていくと信じています。

また、来年度開講になる地域未来学科では、まちづくりにおける中核コーディネーターの役割を理解し、担える人づくりを目指しています。

今日は、小磯先生が花づくりのボランティアなどに見られる市民力など、恵庭の良いところを挙げてくれました。当大学もこの地域の魅力の一つになるように成長していきたいと考えています。

小磯　ありがとうございます。地域創造研究センターが「知のプラットフォーム」として、どのように地域と関わり、どんな成果を目指して、どういう発信をしていくのか。改めて、地に足をつけてじっくり向き合っていかなければいけないという思いでお二人のメッセージを受けとめました。

ともに汗をかく連携へ

小磯　次に、山崎先生に自治体政策研究者のお立場から、これから大学が地方自治体と連携していくアプローチについて、アドバイスをいただければと思います。

山崎　政策に結びつけていく実践型の政策研究は、今から 40 年ほど前の地方分権時代のころから徐々に広がってきています。自治体職員の実務者と一緒に研究する自治体学会も今から 40 年ぐらい前だったと思いますが、まだ個人ベースでの活動でした。

先ほど紹介したように、いくつかの地方自治体で、自前のシンクタンク機能や政策研究機能を持った組織をつくる動きが、この 10～20 年で広がってきています。地域創造研究センターのような大学での取り組みもこの 20 年ぐらいでしょう。以前は、個人的にやっていた研究が、組織間の連携として徐々に発展を遂げていると感じます。

ただ、大切なことは、地に足を付けて長期的な視点で地道にやっているのかということだと思います。

小磯　20 年以上前ですが、私は釧路公立大学地域経済研究センターで地域の課題解決に、実践的に向き合うための政策研究活動を始めました。当時、他の大学でどのような組織や活動があるのかを実際に調査しましたが、あまり参考になるところがなく、試行錯誤しながら活動を進めた経験があります。今は文部科学省も大学の地域貢献や地域連携という政策を後押ししていますが、まだまだこれからだと思います。ご指摘のように地道に取り組んでいくことが大事だと思います。

大西さんの実践的なご経験は、地域創造研究センターが活動していく上で大変参考になりました。A町で行政マンと研究者がうまく一緒に活動できている成功要因はどこにあると感じておられますか。

大西　A町では、町側の調整役を務めている建設課の係長がこれまでシンクタンクやコンサルタントに依存してきたことに対する危機感を、正直に吐露してくれたことがLabの入口だったと感じています。私も非常に共鳴するところがあって、少しずつでもいいので自前で政策力を上げていきませんかと提案し、とにかくコミュニケーションを重ねました。Lab がうまく動き出した要因はそこだと思っています。

「調整」とはたったの２文字ですが、実際のところ、その調整にはかなりの量のコミュニケーションが発生するため、多忙な行政職員にとっても容易な役回りではないと思います。しかし、地域を支える重要なプラットフォームだから、誰かが汗をかかなければいけないという思いを、行政と我々のような研究者とで Lab での「常時接続」型の対話を重ねる中で共有できたことが非常に大きかったと思います。こういった実践が、渡部学長がおっしゃってくださった、ワークショップで一緒に作業するということに繋がると感じています。

小磯　お互いが自分たちの将来の財産にしていくということをしっかり自覚しながら活動するということでしょう。今はデジタル時代でＤＸが叫ばれていますが、そこでの課題は内製化です。外に任せているだけでは脆弱で、いざという時に混乱が起きかねません。それは政策形成力も同様です。いかに汗をかいて内製化して、持続的な形にしていくのか。そこが今日のテーマの一つであると感じました。

文化創造都市への挑戦

小磯　さて、先ほど私から四つの提案をさせていただきました。特に、文化政策については、新しい時代の潮流を見据えた都市政策として、文化創造都市を目指していくべきではないかという提案をしました。日本では体系的にまだ取り組まれていない分野ですが、恵庭らしさを生かせる先駆的な取り組みになるのではないかという思いを込めたものです。原田市長はどのように受けとめられたでしょうか。

原田　私が市役所に入ったころ、神奈川県の長洲一二知事が文化を地方の政策に取り入れようと、「文化のための１％システム」を導入したことを思い出しました。施設建築などの事業費の１％を、文化を感じるものに振り向けようというものでしたが、その後は効率性が叫ばれるようになって、文化を意識して組み入れることはなくなったようです。

ただ、恵庭市には花、そして花のまちをつくり上げてきた市民活動、読書などの文化があり、大切にしなければならないと思っています。

中でも、恵庭市にはカリンバ遺跡という重要文化財があり、今後それをどのように取り扱っていくかが課題です。遺跡の発掘物を展示することは大切ですが、行政の力だけでは、集客や活用が広がっていないまちもあるように感じます。カリンバという重要な遺跡を生かすためには、多くの方々に見ていただき、感じていただくべきですが、そのような場づくりが果たして行政の力だけでできるでしょうか。やはり民間の力も借りながら、文化行政を進めていくことは必要だと思いました。

また、今は高齢化社会で、学問など学びの欲求が高まっています。恵庭市にも高齢者向けの長寿大学がありますが、申し込みが多く、人気になっています。遺跡や歴史を学びたいという要求に答えることができる場づくりもしなければいけないと感じます。恵庭市民を対象にするだけでなく、市外の方にも恵庭市に注目いただき、恵庭で学びたいと思えるような場づくりができるのではないかと思います。民間の皆さんの力も借りながら、そんなことができないでしょうか。センターの皆さんとも一緒に考えていくことができるのではないかと考えていました。

小磯　ガーデンシティなど特色あるまちづくりも含めて、地域の伝統、文化として幅広く捉えていけばと思います。地域創造研究センターの活動において、官と民の創造的な関係づくりは重要なポイントだと考えています。私も民間の力、市民の力を生かした文化政策を展開していくことが大事だと思います。

また、インフラ施設の老朽化問題についても触れましたが、長期的な視点でインフラの管理を行うためには、民の事業手法を取り入れていくことが欠かせないでしょう。

これからの地域創造研究センターに向けて

小磯　最後に皆さんから地域創造研究センターのこれからの活動に対して、メッセージやコメントをいただきたいと思います。

山崎　恵庭市はガーデンシティと言われていますが、都市型の緑をどのようにゼロカーボンやＳＤＧｓに繋げていくのかに関心があります。ゼロカーボンというと、洋上風力やバイオマス燃料があるところのイメージがありますが、そことは特性の違う地域での取り組みになりますから期待しています。

また、センターの運営については、２点ほど指摘したいと思います。

１点目は、地方自治体の立場から考えると、政策研究には短期的・即効的な成果を求める課題解決型と、長期的にじわじわと効いてくるものの二つがあり、そこを見極めておくことです。人材育成は後者になりますが、ともすれば来年の補助金・交付金をどれだけ獲得できるかで、評価することになりがちです。でも、そこは切り分けて考えなければいけません。

もう一つは、大学のセンター運営では、事務局機能などの目に見えない部分をどのように整えていくのかが非常に重要です。華々しい政策研究も、陰では多くの雑務を生み出していきます。そこをいかに処理し、調整していくのかを合わせて考えていくことが、よりよい政策研究に繋がると思います。

大西　政策研究では、小磯先生から提案のあった文化政策に関心を持っています。人口が微増している恵庭市では、他のまちと脈絡を異にした交流人口対策があってもいいように思います。今日、観光は、量から質

に大転換しつつある現状があります。それは、消費単価の高い人を増やすという質だけではなく、例えば、ガーデンシティの市民力とその伝統、あるいはカリンバ遺跡へ関心を持ち、恵庭で学びたいという人たちを増やすという質も意味しています。それゆえ、誰でもいいという誘客ではなく、ガーデニングの手法を学びたい、花のまちづくりを勉強したいという人、遺跡マニアなど、恵庭の地域資源を生かせる人たちにターゲットを絞って、それを学びに来るような人たちを対象にしたスタディーツアー型の観光のあり方を考えてもいいのではないかと感じています。

もう一つは、プラットフォームの運営です。プラットフォームが立ち上がって探索期から始動期に入っていくわけですが、探索期は原田市長がおっしゃったように試行錯誤しながらでいいと思います。その間で、行政と研究者がコミュニケーションを重ねて、始動期に向けて、どこからどう手をつけていくのかを十分議論する。何か一つプロジェクトを仕立てて、その中で事務局体制などをどのように整えていくかを、動かしながら考えてみるといいのではないかと思いました。

小磯　貴重なアドバイスをありがとうございます。大西さんから、文化政策へのアプローチについて、観光の視点からのアドバイスがありました。あえて観光と言わずに、文化創造都市戦略の中に組み込んで消費を高めていく手法が恵庭らしいと感じました。観光という言葉で恵庭の魅力を語っていくよりも、文化や創造といったコンセプトで発信していく方が、恵庭らしさが伝わるような気がします。原田市長、いかがでしょうか。

原田　参考になるお話ばかりで、嬉しく思っています。今、小磯先生から文化創造都市という言葉が出ましたが、その通りだと思います。恵庭は花のまちですから、花づくり、ガーデニングをする人は、恵庭に行かざるを得ないような、そんなものをつくっていきたいと思います。カリンバ遺跡は恵庭に来なければ見ることができませんし、市民にたくさんガイド役が出てくれば、縄文社会を想像できるような、そんなまちになっていくのではないでしょうか。そんなまちに成長できないかと思います。

また、山崎先生が言われようにいろいろな雑務が出てきますが、本質的でない議論は、外部の力も借りながらハイブリッドでやっていくような方法もあるのではないかと感じました。

今日は大変な貴重な話ばかりで感謝しています。ありがとうございました。

渡部　山崎先生のお話にあったように、短期でできることと長期にやっていくことがあると思います。当大学は食から始まり、医療に広がっていますが、健康を維持する上では、幸福感を持つことが大切です。

今日は、このホールの壁にガウディの世界的研究者である建築家・田中裕也さんがサグラダファミリアを実測で作図したものを展示しています。田中さんには当大学の公開講座にお越しいただきましたが、大学としても文化的な取り組みには関心があります。

小磯先生からは花づくりによるボランティア活動などの市民力を恵庭の魅力として挙げていただきました。また、原田市長のお話からは、カリンバ遺跡の可能性を感じました。カリンバ遺跡は大学に隣接していますから、大学としてもこの地域の魅力をバーチャルで全国・世界に発信していくことを検討しているところです。

地域創造研究センターでの取り組みを生かして、皆さんと一緒に知恵を絞りながら、発展的に進めていきたいと思っています。

今日は大変勉強になり、感謝を申し上げます。多くの方に賛同していただき、センターが実りある成果を残していくことを期待しています。

小磯　最後に、お礼を申し上げたいと思います。

本日は、お忙しい中フォーラムに熱心に参加いただきありがとうございました。また、パネラーの皆さんには多くのアドバイスをいただき、感謝いたします。

センターの使命は、大学が地元の自治体と一緒になって地域政策を提案していく新しい社会の仕組みづくりへの挑戦であり、大変厳しい道のりになると思いますが、皆さんの協力を得ながら一歩ずつ進んでいきたいと思います。